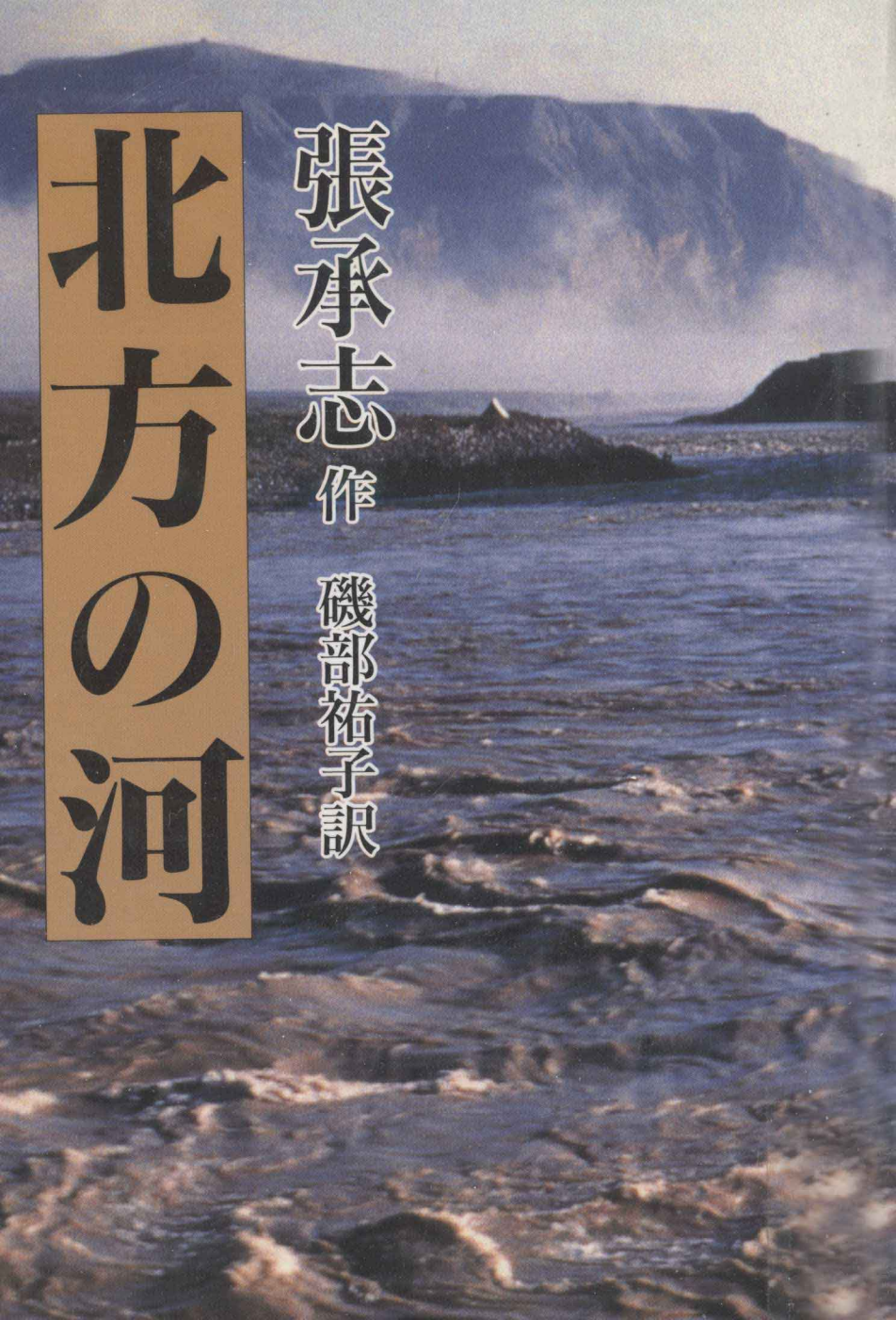


北方の河

張承志作

磯部祐子訳



北方の河

発行——一九九七年十一月二十日／第一刷 ©

定価——本体二四〇〇円＋税

著者——張 承 志

訳者——磯 部 祐 子

発行者——片 岡 健

発行所——鑛 露 満 堂

東京都文京区本駒込三ノ三二ノ二一〇三 ☎ 113-0021

TEL・FAX 〇三―三九四三―三九四六

(編集室)

東京都千代田区三崎町三ノ四ノ八ノ六〇二一 ☎ 101-0061

TEL・FAX 〇三ノ三三二二ノ五八三八

発売——鑛 星 雲 社

東京都文京区大塚三ノ二一ノ一〇 ☎ 112-0012

TEL 〇三―三九四七―一〇二一

FAX 〇三―三九四七―一六七一

印刷——精興社

製本——三水舎

落丁・乱丁本はお取替えいたします

Printed in Japan

ISBN4-7952-1042-X C0097 Y2400E

北方

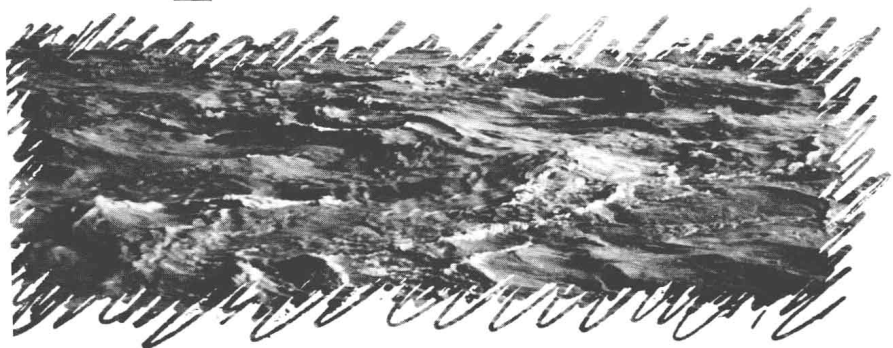
張承志

作

江苏工业学院图书馆
藏书章

總編輯
張承志

露
滿
堂



カバ―の写真Ⅱ黄河……著者撮影

(表紙・本扉はその部分)

中国で生きること

——日本版『北方の河』の出版に際して——

数年ぶりにこの自作の小説をめくりながら、他人の作品に接しているような、ある種の距離感を覚えずにはいられなかった。が、やがて一枚一枚のページとおぼろな記憶から時間の塵が落とされ、あのとき子供っぽく信じていた幻想が無情にも曝け出されていった。同時にこの小説発表後に招いた私に対する世間と文学界の厳しさが、今では一層はつきりとした状況になってきていると感じた。

私は、現在もなお筆を持ち、衰微しつつある文明を何とかしたいと怪物の風車へ駆け向かっているが、一方で、警戒心と防衛術、作家としての要領のよさもかなり身につけてきた。それ故、かつて小説のヒーローの口を借り、単純に情熱と本音を叫んだあの若かった自分を前にすると、恥ずかしさとも感動ともつかぬものが、胸の中に静かに湧き上がってくるのだ。

しかし、あのときの未熟さに感謝したい。弱々しいながらも特権階級への批判の声を、大き

な河の力を借りて宣言し得たのだから。小説で予感した新しいタイプは、すでに一つの秩序と
なっている。しかしながら、文章に生命力があるならば、文章に美がありさえすれば、そして
文章の後ろに民衆というものが存在する限り、必ずしも彼らに負けるはずはないと、私は今も
思う。

しかも、あの北方の河に教えられたように、もし下層の尊厳と自由の権利を放棄しないで求
めていくならば、もしいくら圧迫を感じようともこの旅を続けていくならば、そこには果てし
なく壮大な山河があり、そこには深い歴史物語を持つ素朴な人々がいることだろう。そこでは
人間らしく生存することが可能なのだ。中国で生きるということは、感動的なものだ、と私は
やっと分かった。

最後に、この粗末な習作を丁寧に訳してくださった磯部祐子さん、それに出版社露満堂の片
岡健先生に、感謝の気持ちを表わさせていただきたい。

一九九七年八月 北京にて

張 承 志

中国で生きること

—— 日本版『北方の河』の出版に際して——

(張承志)

はじめに

九

第一章

二

第二章

七

第三章

一〇三

第四章

一四二

第五章

一七七

注

訳者解説 (磯部祐子)

北方の河

はじめに

公正で透徹した認識が、私たちのために総括してくれるだろう、と私は信じる。そのとき、私たちのこの時代に固有の奮闘、思索、烙印そして選択がはじめてその意義を現わすことだろう。ただ、そのとき私たちも、自分のかつての幼稚さ、あやまち、そして限界を悔い、新たな生活を行なうすべがないことに悲嘆を覚えるだろう。これはかなり悲劇的な基盤だ。しかしながら、果てしなく広大で、また悠久の歴史を持つ国からみれば、その前途は結局は明るいのだ。この母体の中に元氣よくたくましい赤ん坊を誕生せしめる一種の血脈があり、一種の気候風土があり、一種の創造する力がある。やがて病的で軟弱な呻吟する声は、彼らの大きな歓声の中に埋もれてしまうだろう。このような観点からみれば、すべてのことは楽観的なのだ。

第一章

下方にきらきら煌くその河を、彼は長い間眺めていた。河は間近にあった。大きな河谷と左右に見える無数の浸食溝は、一目瞭然たる巨大な地形の模型のようだ。その中を彼を乗せた車が、ブツブツとクラクションを鳴らしながら登っていく。彼は傾いた車両に、きっちり寄り掛かった。車は深い淵に面しているかのようだ。

彼は地図を見、一方で河谷と高原を眺めながら、縮尺の非常にかげ離れた地図を同時に見ているように思った。この峡谷はなんと深いのだろう。このような峡谷が雨水によって切り裂かれてできたものとは、とても想像できない。峡谷の両側は、均一の起伏をした黄土の帽子のようだった。いや、地理の本にある概念が頭に浮かんできた。「黄土の帽子」というのではなく、「梁^{りょう}」や「峁^{ぼう}」と言うのだ。概念によって描写しなければなるまい。

彼は再びその梁や峁を、そして浸食溝を注意して見回した。この深く険しい峡谷は、実に雨

水による浸食で出来たものなのだ。黄土の道路に出来た細い溝を眺めながら思った、早朝に雨がかなり降ったので、今もまだ水は溝を伝い、ざあざあと音を立てて、下方のどこまでも深い無定河の河谷へ流れているのだ、と。

車はしばらく激しく上下に揺れた。彼はしっかりと車の横板を握りしめ、依然として、下方の深い谷にうねうねと延びている無定河を見ていた。その濁った土色の河水は、高原の陽光に晒され、強烈な光を反射していた。空は青くて遠く、洗ったように澄んでいた。黄土の帽子……梁や峁は海のように青い空と直に接していた。淡黄色でわずかに白い梁峁の波濤と天空が一つに溶けあっていた。彼は気持ちさがさわやかになり、この大自然はシンプルで、調和がとれていると思った。「青々と輝く空^{*1}」と民歌を口ずさみ、心地よさを覚えた。解放マークの大きなトラックが彼を乗せて走り、それはあたかも浸食溝や梁峁の波浪のうねりの中を、フルスピードで泳いでいるかのようにだった。

彼は高原を目にしながら、視野の中の景観を極力頭に留めようと思った。眉をしかめながら、『中国自然地理』の中の専門的概念の内容を思い出していた。「曲流寛谷」、突然一つ概念が躍り上がってきて、思わずほくそえんでしまった。本には、トラックで横切ってきたこの無定

河の巨大な浸食溝が、「曲流寛谷」と記されていたのだ。おもしろい、「曲流寛谷」と「拐弯した大溝」とに、何か厳格な区別があるというのか。しかし、もし試験の答案で「拐弯した大溝」あるいは「黄土の帽子の中のカーブした河にみえる大きな深い溝」などと書けば、大学院の入試は駄目になること請け合いだ。あの本には他にも、いくつかの厳格な定義があるようだったが、思い出せなかった。しかし、何とか「曲流寛谷」だけは頭に叩き入れた。しかも地図と現実の大地を前にして、しっかりと記憶することができた。彼は「曲流寛谷」と一声つぶやき、からだの向きを変えて、ぎゅっと車の横板を握りしめた。

車の中は年輩の農夫でいっぱいだ。彼は車の中を見ながら、ふと顔を綻ばせた。今日の彼はこのほか心地よく、まるで春季運動会の早朝に、晴朗無風の好天気を見ている走高跳びの選手のようなだった。車中の農民たちは解放マークの車両の中で上下に揺れていた。居眠りしている人もいれば、しゃべっている人もいた。しゃべっている人たちはかすれた陝西なまりでどなりまくり、エンジンの鳴り響く音も、ヒューヒューという風のうなる音も意に介していなかった。この農民たちは自由市場で儲けて郷里に帰るのだろう。早朝、綏徳^{すいとく}駅で切符を買ったとき、あの青いふち飾りのついた白いタオルを首にまいている老人が語気も荒々しく、大きな声で叫

んでいるのを目の当たりにした。

「車両を一つ追加しろ、あの大きな解放マークの屋根つきトラックを追加しろ！　おい、トラックを一台追加しろ！」

しかし、いま老人はちょうど運転室の後ろの窓にもたれて座っていた。声をはりあげて何かをしゃべったり、眼光を鋭くしてわざと声をひそめ、車内の動向をぐるりと見渡したりしていた。

ふと、一人の紅顔の青年が目に入った。なんと純朴そうな青年だろう。両手で一つの小さな黄色の片かけの鞆をしっかりとつかんで、一言も口をきかず、みなに背を向けてひとり座っていた。トラックの外側で、逆巻いた黄砂が何度も彼を覆い隠した。

「ナツメ！　河岸のナツメ！」

この青年が昨日、綏徳の城外でこのような胸間声をはりあげて呼び売りしていたのを思い出した。すべてが農民だ。質素であり、なんとかやれていて、好ましくて、自分の考えを持つ農民だ。彼らは綏徳の街で作物を売って金を稼いで帰ってきたのだ。あの二人の白いひげとゴマ塩ひげの老人は物売りではなく、親戚の家へ遊びに行つて来たのだらう。彼らはみな帰つてき

た。陝北^{せんぽく}の有名な綏徳の街から、無定河の兩岸の上下にあるヤオトン（山崖に掘った洞穴式住居）や田舎家へ帰ってきた。女たちと子供は「飴餡^{ヘーロー*2}」を作り終え、オンドルのアンペラをきれいに掃いて彼らを待っている。幾層にも重なる波濤のような谷川や梁峁、青々とした空、濁った黄色の水もみな彼らを待っている。

彼の心の中は落ち着いていた。大学を離れたときから落ち着きを覚えてはいた。しかし、黄土が車の覆い板から巻き上がってきて、どんなに口の中の砂をぺっぺつと吐き出すことがあっても、やはり落ち着きを感じていたのだ。この濁った河、この無辺無限の黄土の帽子とこの青く質朴な空、全てが彼を落ち着かせた。

彼は車両の左前の角に一人の女性が立っているのを見た。何秒間か観察したあと、この人は北京^{ぺきん}の人だと見当をつけた。彼女は彼に背を向けて黙って立っている。この女性は自分を避けていると思った。人民公社の生産隊に入隊した経験のある北京出身の学生なら、一目見ただけですぐにお互いを判別出来た。彼は彼女もとくに自分に気づいているにちがいないと思った。トラックは一本の土手道をくねくねと曲がりながら突き進んだ。車いっぱいの農民たちは左右によろめいたが、その娘はしっかりと立ったまま、微動だにしなかった。自分と同じく生産